

んだ。

「もう帰ろうかしと母。

「うん。もういいなあ帰ろうしと私。

ところが二人共無心に動き回ったので、下る道も方角も全くわからなくなっていた。

「困ったナアー。どうする母ちゃんし

「うん待てよ、登ってくる時、この道わったか、いや、あっちの道わったかしと母は頭をひねる

（あの時の山の道は、ハツキリした道は無かった。ただ山に出入りする人達が、草や枯れ枝などを踏み倒して出来た紐い（たおり道）でした）

こもれ日の太陽は真上。あっち行き、こっち行き、うろろうろしていたその時、「ポーツポーツ」と汽車の汽笛が山考のよう響いてきた。すると、とっさに母が「あーっ。今汽車が走ったな。ほな、こっちが東やしと、自問自答のようにな、うなずき叫んだ。

「よっしや、もうゆかった。あの道を降りた